

笹原

私が五歳の頃、母は満州からの引揚げによる過労のために心臓を患い、長期間の自宅療養をすることとなった。三人兄妹の真中であつた私は、いたずらで一番世話の焼ける子供だつたせいか、信州に住む母方の祖父母に預けられた。

中央線の茅野からバスで四十分ほど播られると終点の堀という小村に着く。そこから、なだらかな勾配の田舎道を、唐松林に何度も入つたり出たりしながらゆるゆると一里ほど登ると笹原という集落に出る。百軒あまりの茅葺屋根の農家が、そこかしこに岩石の露出した道に沿って曲がりくねつた帯のように延びている。新しく湯気の立ちそうな馬糞や、古くてわらのようになった牛糞の転がる坂道を登ると、村の中央の辺りに木造の火見櫓があり、その二軒ほど上に祖父の家があつた。村の旧家である祖母の家に

藤原正彦

婿として迎えられた祖父は、その頃、小学校の校長を引退して百姓をしていたが、同時に部落の長老として村を取りしきつていた。四季の美しい八ヶ岳の広大な裾野に抱かれたこの地に、私は両親と別れて約一年間を過ごしたことになる。祖父母はこんな私を不憫に思ってくれたそうだが、当の本人は淋しくも何ともなく、また自分が三人の子供の中からやつかい者として選ばれたことなど知る由もなく、自分だけが田舎で遊べると大喜びでいた。

信州での生活が始まってしばらくの間は、村の子供達に「東京人」と呼ばれ差別されたりしたが、そこはやはり子供同士で、間もなく田畑や山河と一緒に飛び回るようになった。その頃東京の子供達の間で流行っていた「水雷艦長」なる遊びを教えてやった。またたくうちに村の小中学生の間で大流行したりした。私は

ほぼ完全に信州弁を話せるようになり、そして、持前の無鉄砲さと喧嘩強さにより、いつの間にかギキ大将にまでなっていた。

菓子のない時代であったから、おやつはもっぱら草木の実だった。柿、柿渋(信濃小柿)、アケビ、野イチゴ、スモモ、カラモモ(杏)、栗、くるみ、梨、地梨(ボケの実)、須栗、ミネズボ(アララギの赤い実)等の数え切れないほどの実が村にはあって、何はどこのものが最も甘い、などということは諳(そん)じていた。野生のものが多かったが他人のを失敬することも時にはあった。畑の野菜を盗むことは敵に戒められていたから手を出すことは決してなかったが、木の実などに関してはそれほどの罪悪感はなかった。そもそも野にある木などは、持主が誰なのか分りにくい。

ある時、自分のヒロスミと吉平を引き連れて遊んでいるうちに腹が減ってきた。丁度、道から少し入った所に大きなカラモモの木があって、熟した実が枝もたわわになっていた。どこの誰の所有かは分らなかつたが早速頂だいすることにした。顔も猿に似ていたがとりわけ身の軽いヒロスミが木によじ登り、野球のうまい私が落下するカラモモを受け、呑気で多少ウスノロの吉平が道で見張りをすることになった。作戦は成功で、その上このカラモモは格別に美味しかったから三人は大感激だった。ところがその日の夕食時に、この話を得意気に語ったところ、祖父にいきなり、

「バカッ、あの木は平作のもんだ」

と怒鳴られた。何のことか分らずに目を白黒させていると、

「平作は吉平のトッサ(父さん)だ」

と今度は大声で笑われた。

こんなギキ大将の私が、一度だけ自分の前で面目を失ったことがある。ある夏の日、数人の部下を従え明治温泉の方面へ探検に行つた時のことである。灌木をかき分け進んでいた我々一行は、幅十メートル程の溪流のほとりに出た。川には大きな岩がごろごろして流ればさして速くなかつたが、鬱蒼とした林に陽光をさえぎられた川面は暗くよどんでいて、どことなく不気味さを漂わせていた。所々に深みのあることが流れ具合や色の濃淡で簡単に分る。皆が岩から岩へと飛び移つては渡れそうな場所を探し始めたが、間もなく一人が浅瀬をうまく見つけた。彼は半ズボンのすそを思い切りたくし上げてから、注意深くゆっくりと歩み始めた。深い所で水が股の辺りまできた時、

「おーお、冷てーぞやーい」

と頓狂な声を上げた。皆が同じように続いて渡った。ところが最後に残された私だけが何故かひるんでいた。半ズボンをたくし上げてはみたが足が一步も前に出ないのである。私より身体の小

さな者が何人も渡ったというのに、ふくらはぎの深さの所に立つたまま身動き出来ない。流れの向うでは、

「やーい正彦、何やってるだ、早くこっち来いやれ」

「オメードーユード、コウエーダカ(お前どうした、恐いのか)」などと口々にはやしたてる。自分に嘲笑されていると思うと恥ずかしくて堪まらないのだが、いくら焦ってみても足が恐怖にすくんできて言うことを聞かない。数分もしてからやっと、

「そっちへ渡っても何もネーズラで帰るじゃ(帰ろうよ)」

と言うのが精一杯だった。子分達はしぶしぶこの命令に従ってくれたが、私は屈辱感で一杯だった。

最近になってこの事件が突然思い出されたのだが、あの時の恐怖感の正体があっけない程容易に解明した。

私が母や兄妹と共に満州の新京(今の長春)を脱出したのは終戦の数日前だった。それから丸一年間、当時満二歳になったばかりでよく歩けなかった私は、母に抱えられたり引きずられながら満州と北鮮の野山を彷徨した。無論その間のこととは全く記憶に残っていないのだが、母が帰国後に著した引揚げの記録『流れる星は生きている』により当時の状況がうかがえる。その中に、私達が赤土の山を這いずり回ったことなどと共に、濁流の川を渡った

時の描写がある。母は泣き叫ぶ子供を叱咤しては一人ずつ小脇に抱え、泥流に押し流されながら渡河したそうである。

私の川に対する恐怖心はここにあったらしい。二歳で体験した異常な恐怖が、いわゆる記憶としてではないが何らかの形で、五歳になっても身体に残っていたのだろう。こんな事が心理学的に起り得るのかどうか私には分らないが、勇気と冒険心に富んだ腕白少年だったことを考えると、他に説明のしようがないのである。

笹原における一年の田園生活は、今では何もかも楽しい思い出となっている。

先日、亡くなった叔母の法事ついだったが、久し振りに冬の笹原を訪れた。今では、茅野駅から笹原まで定期バスが走り、村の中央を貫くでこぼこ道は滑らかなアスファルトになり、無器用に丸太を組み合せただけの火見槽はより高い鉄塔に置き換えられている。祖父は十年ほど前に亡くなったが、八十五歳の祖母は足腰に衰えはあるものもまだ健在である。二人でこたつにあたりながら降りしきる雪を見ていたら、なぜか無性に外を歩きたくなくなった。縁側に腰かけて、もう長いことはいたことのないゴム長に足をこじ入れていたら、見ていた祖母が、

「この寒いに（こんなに寒いのに）」

となかば憐れむように言った。

前の通りをバス停のある下りまで下り、そこを北に曲がった。

茅葺屋根はすっかり姿を消してしまい、新しい色瓦がいらかを競っていた。雪が積っていただけ救われたような気がした。村はずれにあるウブスナサマ（産土様）は少しも変わっていないかった。

松林に囲まれた小さな境内の中央には産土神を祭った社があった。いわば村の氏神様みたいなものだったが、付近の野原を走り回っていた子供達にとっては、高原の強い日射からの唯一の逃げ場でもあった。また私の大学受験の際には、合格祈願に祖母が毎朝お参りした所でもある。雪で白くなったウブスナサマは私の記憶にはないような気がした。かつて村人の誰もがしていたように、社の前で両手を合わせていたら、毛虫も草いきれもないウブスナサマが、妙に奇異なものとして感じられた。笹原にはガラギラした夏の思い出しかない、と思いつつ再び下尾根の方角に下り始めた。下尾根には祖母の田と畑が一面ずつある。ウブスナサマから歩いて来てちょうど下尾根にかかる辺りが、笹原中で最も眺望のきく場所である。私は立ち止まってうちの田を探してみたが、同じような田の中からすぐに見つけることが出来てとてもうれしかった。ふと、遠くの峠道をこちらに向かつて祖父が、いつ

もそうしていたように黒いゴム長をはき、黒いエリ巻きで頭からあごをぐるりと包み、歩いてくるような思いに捉われた。大柄な身体を腰のところで前に屈めてゆっくり歩く様までがはつきり目に浮かんだ。私にはとりわけ厳格な祖父であったが、この時はしわだらけの額の下にめったに見せたことのないやさしい微笑があった。雪の田畑には何の変わりもない、時が勝手に空回りをしたただけだ、と思えてならなかった。

私は、そのまま遠くへ行ってしまうような峠道には入らず、踵を返した。冬の思い出もあったと考えるとなぜかホッとした。村の周囲を大きく回っているうちに、ゴム長の底から冷気が伝わってきたのか、爪先がかじかんで痛かった。この痛さも確かな冬の思い出だと思った。

家のガラス戸を開けると、こたつでうたたねをしていた祖母が、重たそうに上半身を起こしながら、

「寒かったら（寒かったでしょう）」

と言った。私は、

「寒くなかった」

とだけ言って急いでこたつに足をつっこんだ。

（お茶の水女子大学）